

チャイコフスキー／バレエ音楽「くるみ割り人形」Op.71

バレエ大国として知られるロシア。もともとイタリアで誕生したバレエは、16世紀後半にフランス王家に嫁いだイタリア人、カトリーヌ・ド・メディシスによって宮廷文化の一部として持ち込まれてフランスで開花、さらにフランス文化に憧れを抱いたロシアへと伝わり、19世紀後半にクラシック・バレエの黄金時代が築かれた。その頂点が、ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840-1893）の《白鳥の湖》、《眠りの森の美女》、《くるみ割り人形》の3大バレエである。

チャイコフスキーの3大バレエ音楽はいずれも、バレエに従属した伴奏音楽ではなく、独立しても成り立つ芸術作品としての魅力を放っている。それ以前からドリーヴの《コッペリア》のようなフランス・バレエ音楽の名曲は存在したが、チャイコフスキーはさらに音楽の地位を押し上げた。

《くるみ割り人形》は3大バレエ最後の作品で、1892年12月18日（旧暦6日）、サンクトペテルブルクの帝室マリンスキー劇場で初演された。芸術監督のフセヴォロジスキーが、この2年前に《眠りの森の美女》が同劇場で大成功を収めたことから、チャイコフスキーの腕を見込んで再び新作バレエの音楽を委嘱したのである。芸術監督はドイツの作家、E.T.A.ホフマンの《くるみ割り人形》を題材にすると決めていた。

E.T.A.ホフマンは、司法官という職に就きながら、作家、作曲家、画家などいくつもの顔をもつ奇才で、文学においては現実と空想が入り混じった奇想天外な世界を描いた。2つの物語が同時進行する《牡猫ムルの人生観》のようにトリッキーな手法も得意とし、《くるみ割り人形》も、本来は物語のなかにもう一つの物語がある「入れ子」のような構造を持っている。芸術監督が用意したのは原作そのものではなく、アレクサンドル・デュマがフランス語で脚色した『くるみ割り人形の物語』であった。名振付師、マリウス・プティパによるバレエ台本では、おとぎ話仕立てにストーリーが単純化され、後半のお菓子の国の場面がクローズアップされた。なお、振り付けも当初プティパに依頼されていたが、リハーサル中に病に倒れたため、レフ・イワーノフが彼の構想をもとに完成させた。

バレエのあらすじは次のようなものである。ドイツのジルベルハウス家の少女クララは、クリスマス・イヴの夜に、名付け親のドロツセルマイヤーからくるみ割り人形を贈られるが、兄が壊してしまい、クララは優しく介抱する。真夜中になるとクララは幻想的な世界に引き込まれる。ねずみたちが襲いかかり、ねずみの王様とくるみ割り人形の一騎打ちとなる。クララがくるみ割り人形を救うと、人形は王子に変身してクララをお菓子の国へと招待する。お菓子の国の宮殿では、女王のこんぺい糖がお祝いの宴を催す。チョコレート、コーヒーなどが代わる代わる各国の踊りを披露し、女王みずからも踊ってクララを祝福する。

チャイコフスキーはバレエ上演に先立って、《こんぺい糖の踊り》や《花のワルツ》などバレエの代表的な曲を抜粋した組曲版を先に初演していた。この組曲版は今日まで広く親しまれているものだが、バレエ全曲版には、フランスやドイツの民謡が用いられ、子どもたちの合唱が入ったりと、組曲版にはない魅力も満載である。組曲版の中心を成す第2幕のエキゾチックな舞曲やワルツも聴きどころである。チャイコフスキーの魅惑的な音楽とともに、物語の世界を楽しみたい。

序曲：純真さにあふれる弾んだ音楽が、おとぎの世界へといざなう。

第1幕

第1場

- 1.情景 — クリスマス・ツリー —
- 2.行進曲：こどもたちがツリーのまわりで行進する。
- 3.小さなギャロップと両親の入場：後半はフランス民謡による軽快な踊り。
- 4.踊りの情景：謎めいたドロツセルマイヤーが登場、こどもたちにプレゼントを渡す。機械仕掛けの人形たちが踊る。
- 5.情景とグロスファーター（お爺さん）の踊り：ドロツセルマイヤーがくるみ割り人形を渡す。壊れた人形を介抱するクララ。大人たちはドイツ民謡による踊りに興じる。
- 6.情景：クララがくるみ割り人形とともに床につくと、異界への扉が開かれる。12時を知らせるフクロウ時計がドロツセルマイヤーの顔に変わり、ツリーがどんどん大きくなっていく（クララがどんどん小さくなっていく）。
- 7.情景：ねずみたちと、くるみ割り人形が率いる兵隊たちとの戦闘が始まる。クララがスリッパを投げて助けると、優美な旋律とともにくるみ割り人形が王子に変身する。

第2場

- 8.情景：王子とクララは冬の針葉樹林を抜けてお菓子の国へと向かう。ロマンティックで雄大な調べが広がる。
- 9.雪のワルツ：雪の精たちがワルツを踊る。途中から児童合唱がヴォカリーズ（言葉のない歌唱）で加わり、幻想味を引き立てる。

第2幕

第1場

- 10.情景：夢見るような音楽にのって、ふたりはお菓子の国へと向かう。
- 11.情景：お菓子の国のお城に到着。王子は命の恩人であるクララを、女王のこんぺい糖に紹介する。ファンファーレが歓迎の饗宴の開始を告げる。
- 12.デイベルティスマン：ここでは異国情緒あふれる様々な踊りが繰り広げられる。
 - ・チョコレート「スペインの踊り」：ポレロのリズム。トランペット独奏が活躍。
 - ・コーヒー（アラビアの踊り）：東洋風の音楽。木管や弱音器付きのヴァイオリンの音色が、物憂げな雰囲気醸し出す。
 - ・お茶（中国の踊り）：ファゴットのユーモラスな低音の上でフルートが活躍。
 - ・トレパック：ロシア農民の勇壮な踊り。
 - ・あし笛の踊り：アーモンド菓子たちが踊る。フルートが活躍。
 - ・ジゴニーニョおばさんとポリシネルたちの踊り：楽しい音楽に乗ってスカートからこどもたちが次々に飛び出す。フランス民謡による。

13.花のワルツ：砂糖菓子バラの花束を持ったこんぺい糖の侍女たちが華麗なワルツを踊る。主旋律はホルン。チャイコフスキーの音楽のなかで最も有名な曲の一つ。

14.パ・ド・ドゥ：女王のこんぺい糖とお菓子の国の王子による、バレエ最大の見せ場である。

- ・序奏 ハープで始まる壮麗な音楽。バレエ終盤の山場へと導く。

- ・ヴァリエーション1（タランテラ）：王子がイタリアの舞曲タランテラを踊る。

- ・ヴァリエーション2（こんぺい糖の踊り）：主旋律を奏するのはチェレスタ。チャイコフスキーはこの新しい楽器を旅行中のパリで見つけた。きらめくような音色が女王の美しさを想像させる。

- ・コーダ：一連の踊りのフィナーレにふさわしい快活な音楽。

15.終曲のワルツとアポテオーズ：祝福され、幸福感に満たされるクララ。みつばちに扮したこどもたちが飛び交い、華麗なワルツでバレエは幕を閉じる。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。